
シンポジウム 7

尿路結石治療の坂と雲 ～新たな時代の幕開け～

座 長 和 田 耕一郎 (島根大学医学部 泌尿器科学講座)
井 川 掌 (久留米大学医学部 泌尿器科学講座)

司会のことば

尿路結石症は、生活習慣病に位置づけられる頻度の高い疾患であり、泌尿器科の臨床医にとって避けて通ることはできない。その診療においては、特に診断や治療に用いられる機器の進歩と技術の確立により、低侵襲で質の高い医療が提供されるようになった。その一方、その先にゴールが全く見えていないほど奥が深いのもまた、尿路結石という疾患の特徴といえる。

そのような現状のなか、「坂の上を目指して - 新時代への夢と課題 -」をテーマとした第 75 回 西日本泌尿器科学会総会において、本シンポジウム 7「尿路結石治療の坂と雲 ～新たな時代の幕開け～」が開催された。折しも、尿路結石症診療ガイドライン 第 3 版が発刊された直後でもあり、臨床医の関心を集めるテーマであったことは言うまでもない。その内容として TUL, ECIRS, 効率性を追求した新規デバイス, 小児の結石手術, 現状と将来性に関し、5 名のスペシャリストにご講演を頂いた。

SY7-1. 「レーザー碎石技術 up date」 藤田雅一郎先生

尿路結石の治療に最も普及しているホルミウム (Ho) : YAG レーザーについて、レーザーの性質や碎石の仕組み、最近のトレンドである Dusting について詳述した。特にロングパルスとショートパルス、Photochemical と Photothermal の違いや、実際の使用経験を交えた MOSESTM Distant と Contact モードの使い分け、といった実用性の高い内容であり、いかにレーザー機器の特性を生かして効率よく碎石して Stone-free を目指すか、を指南する内容であった。

SY7-2. 「基礎疾患を有する小児の尿路結石に対する治療ストラテジー」 柿木寛明先生

小児の尿路結石に対する外科的治療の方法や課題に

ついて、自験例を踏まえて解説した。小児症例における順行性アプローチの手順や使用機器に加え、体格や解剖学的理由をふまえた代替機器を準備しておく必要性、小児科や麻酔科との連携など、成人とは異なる対応について具体的に提示した。小児結石の手術について聴講できる機会は貴重であり、特にトラブルシューティング、自省を交えた手術の解説は大変興味深い内容であった。

SY7-3. 「ECIRS をより安全に、より確実に完遂するための工夫」 小林隆彦先生、ほか

標準術式のひとつとして普及した ECIRS は、各施設のマナーやアウトカムにばらつきが多い。演者がこれまで安全性と確実性を追求してきた軌跡を踏まえ、術前のシミュレーションや体位、合併症の少ない穿刺法、効果的な碎石・抽石法などについて、図や動画を交えて解説した。特に、腎被膜に対して垂直に穿刺する意義、側臥位をとってからの逆行性アプローチ、複数の術者が共同で手術を実施するための工夫に関する内容は、成績向上を目指す施設が導入を検討すべきと考えられる内容であった。

SY7-4. 「手術における効率化・費用対効果向上のための新しいデバイスについて」 富永悠介先生

まず、内視鏡の故障と経済的損失について提示したうえで、4 社から発売されている 5 種のディスプレイブル軟性尿管鏡について、各製品の価格や性能を使用経験も踏まえて比較し、適用すべき症例について考察した。続いて新規の碎石・抽石を効率化できるデバイスとして ClearPetra[®] や LithoClast[®] Trilogy を紹介し、実際に使用したうえで手術の効率化への可能性について解説した。碎石機器と内視鏡の細径化によって低侵襲性が発達した現状で、効率や費用対効果の問題を整理できる非常に現実的な内容であった。

SY7-5. 「近未来の尿路結石治療」 岡田淳志先生、ほか

尿路結石症の疾患概念とマネジメント法をレビューし、医師が認識しておくべき原則を解説した。そのうえで、導入から間もない新しいレーザー機器（Tm：YAG と TFL）や、本邦では未導入の尿管鏡支援ロボット、AI-ESWLなどを紹介した。また、今後導入される可能性がある治療法として既存の手術支援ロボットによる切石術や、まったく新しい碎石技術である Ultrasonic propulsion や Burst wave lithotripsy（BWL）に触れるとともに、診断・治療・予防に有用となる技術や薬剤の必要性を提示した。これからの結石治療の最前線とその未来が垣間見えた、参加者の胸が躍るような内容であった。まことに僭越ながら、講演中に提示された演者作の絵画は、そのタッチや色づかいもさることながら、山頂までの行程に込められた深い意味と「坂の上の雲」を連想させる普遍性に、一

鑑賞者として大変大きな感銘を受けたことを申し添えたい。

進歩する診断モダリティや内視鏡、治療デバイスを取り入れ、治療後も予防を含めて経過観察を実施する臨床医が、まさに今のぼっているその坂の上に見ようとしているもの、それこそが「尿路結石治療の最終形」と思われる。しかし、その最終形は未だ漠然としてつかみどころのないある意味抽象的な存在で、まさに雲のような存在と思わざるを得ない。そう感じさせられた本シンポジウムを司会者として担当させて頂けたことに、大会長の雑賀隆史先生やプログラム委員の方々、シンポジストの先生方、共同司会の井川 掌先生に感謝を申し上げ、「司会のことば」の筆を擱くこととする。